

# 歴史人物を描いた文学作品 5

## はじめに

「歴史人物を描いた文学作品」の第5回目は、江戸時代幕末維新期の歴史人物18人と一つの組織を描いた文学作品を紹介します。ペリー提督から近藤勇まで、作家の目を通した歴史人物を歴史小説という形で再認識していただければと思います。

なお、資料リストで紹介しました歴史小説は、その人物を描いた全作品を紹介している訳ではなく、当館で選択させていただいた作品です。

## [資料リスト](#)

### 1. ペリー. M. C. (Matthew Calbraith Perry) 1794~1858

米国海軍軍人。1809年父や兄同様海軍に入ります。1833年ブルックリンの海軍工廠に配属され、1837年米国初の蒸気軍艦を建造し初代艦長になりました。のち東インド艦隊司令長官兼遣日特使に任命され、嘉永6年(1853)6月3日4艦を率いて浦賀沖に投錨しました。再渡来を表明して中国に引き上げ、翌安政元年(1854)1月16日7艦で江戸湾に現れました。ペリーは幕府を譲歩させ同年3月3日、日米和親条約を締結しました。

### 2. 阿部正弘 (あべ まさひろ) 1819~1857 (文政2年~安政4年)

備後国福山藩主。天保7年(1836)家督を継ぎ、弘化2年(1845)水野忠邦2度目の失脚後に老中首座となり、以降没するまで老中職にありました。嘉永6年(1853)ペリーが来航すると、徳川斉昭や島津斉彬らと協調政策をとって諸大名に外交について諮問し、朝廷には外交事情を奏聞するなど国論の統一をはかろうとしました。

### 3. 堀田正睦 (ほった まさよし) 1810~1864 (文化7年~元治元年)

文政8年(1825)佐倉藩主となり、天保12年(1841)老中になりますが同14年(1843)辞任し、佐倉で藩政改革を行い蘭学の重視・西洋医学の振興・洋式軍備の採用などを行いました。また成徳書院を建てて儒学の振興を図っています。安政2年(1855)老中首座になり、外交問題・将軍継嗣問題など激動する国内情勢に対処しました。尊王攘夷を主張し開国に反対する水戸派を抑えるため、安政5年(1858)自ら上洛して開国の勅許を得ようとしたが失敗に終わりました。その直後、井伊直弼が大老に就任し正睦は老中を罷免されました。

### 4. 井伊直弼 (いい なおすけ) 1815~1860 (文化12年~万延元年)

嘉永3年(1850)彦根藩主となり、嘉永6年(1853)ペリー来航時には藩兵2千を率いて江戸湾の警備にあたりました。幕府権力が衰退する中、強硬な攘夷論者の徳川斉昭と結び幕府権力の維持強化に努めました。堀田正睦が老中首座になると外交・将軍継嗣問題で水戸派と激しく対立しました。徳川慶福を推す紀伊派は安政5年(1858)直弼を大老に押し立て、大老に就任した直弼は慶福を将軍継嗣としました。直弼は勅許を待たずに日米通商条約に調印し、これに反対する大名・公卿などを弾圧しました(安政の大獄)。そのため万延元年(1860)桜田門外の変で水戸浪士などに暗殺されました。

### 5. 安藤信正 (あんどう のぶまさ) 1819~1871 (文政2年~明治4年)

弘化4年(1847)陸奥平藩主となり、万延元年(1860)老中となって外国御用取扱を命じられます。同年井伊直弼の死後老中久世広周と共に幕政を取り仕切り、米国公使ヒュースケン暗殺事件・小笠原島開拓問題・貨幣改革などを処理しました。さらに皇女和宮の徳川家茂への降嫁を実施し公武合体に尽力しましたが、対外政策を尊王攘夷派に非難され文久2年(1862)1月坂下門で水戸浪士に襲われて負傷し、同年4月老中を辞しました。戊辰戦争では奥羽諸藩と共に官軍に抗しています。

#### 6. 勝 海舟 (かつ かいしゅう) 1823~1899 (文政6年~明治32年)

嘉永3年(1850)赤坂田町に私塾を開き蘭学と兵学を教えました。安政2年(1855)海軍伝習生として長崎に赴き、安政3年(1856)江戸に帰り軍艦操練所教師方頭取になります。万延元年(1860)日米修好通商条約批准のため外国奉行らが渡米する際、咸臨丸の船長を務めました。帰国後軍艦奉行並になります。徳川家茂の許可を得て神戸海軍操練所を開設し、元治元年(1864)には海軍奉行となりました。但し操練所の開放的な方針を疑われて罷免され蟄居となります。慶応2年(1866)海軍奉行に再任され、第二次長州征伐では全権使節を務め平和的交渉に尽力しました。鳥羽伏見の戦いの後、西郷隆盛と会談し江戸城の平和的明け渡しに成功しました。明治5年(1872)新政府の海軍大輔になりました。

#### 7. 佐久間象山 (さくま しょうざん) 1811~1864 (文化8年~元治元年)

幕末の思想家・兵学者。信濃国松代藩5両5人扶持の給人佐久間国善の子です。天保12年(1841)藩主真田幸貫が老中に就き翌年海防掛になると、命で「海防八策」を上書しました。また江川太郎左衛門に入門して砲術を修めています。嘉永6年(1853)ペリーが来航すると、藩の軍議役に就任し、「急務十条」を老中阿部正弘に上書しています。安政元年(1854)吉田松陰の事件に連座して小伝馬町の獄に入り、のち松代に蟄居しました。元治元年(1864)幕命で上洛し一橋慶喜などに時務を論じました。同年7月京都三条木屋町で暗殺されました。

#### 8. 横井小楠 (よこい しょうなん) 1809~1869 (文化6年~明治2年)

熊本藩士。天保10年(1839)藩命で江戸に遊学し、藤田東湖・川路聖謨らと交流しました。翌年帰国し藩政改革を行います。その後諸国を遊歴し吉田松陰・橋本左内らと交わりました。安政5年(1858)越前藩主松平慶永に招かれて政治顧問となり、万延元年(1860)「国是三論」を著し、富国強兵を主張して左内死後の藩政改革を指導しました。文久2年(1862)慶永が幕府の政事総裁職に就くと幕政改革・公武合体運動の推進者として重きをなしました。翌年(1863)の越前藩の政変で失脚し熊本に帰りました。明治元年(1868)新政府に出仕しましたが、翌年(1869)保守派に暗殺されました。

#### 9. 島津斉彬 (しまづ なりあきら) 1809~1858 (文化6年~安政5年)

襲封にあたりお家騒動(お由良騒動)が起きましたが、改革派の後押しで嘉永4年(1851)藩主になりました。藩政改革を実施し殖産興業政策をとって、大砲・火薬・ガラス・陶磁器・アルコールなどを作り、また電信・ガス灯・写真機などの実験を行いました。さらに5隻の軍艦を建造しています。日米修好通商条約勅許問題や、将軍継嗣問題で一橋慶喜擁立ため活動しましたが、井伊直弼の大老就任で徳川家茂が14代将軍に決定し活動は頓挫しました。

#### 10. 中浜万次郎 [ジョン万次郎] (なかはま まんじろう) 1827~1898 (文政10年~明治31年)

漁師悦介の子で土佐幡多郡中の浜浦に生まれました。天保12年(1841)操業中に乗組員5人と共に遭難し、半年の漂流後米国の捕鯨船ホーランド号に救出されアメリカに渡りました。ジョン=マンと改名し英語・数学・航海術・測量術などを学びました。捕鯨やカリフォルニアの金山での労働ののち嘉永3年(1850)にボイド号で帰国しました。嘉永5年(1852)土佐にて藩侯徒歩格で仕え、翌年(1853)幕府に普請役格として仕え、江川太郎左衛門の手付となつ

て外国使節の書信の翻訳を行いました。

#### 11. 吉田松陰（よしだ しょういん） 1830～1859（天保元年～安政6年）

吉田家は代々山鹿流兵学師範で禄高は57石6斗です。弘化2年(1845)から松下村塾で指導を受けました。その後各地を遍歴して見聞を広め、安政元年(1854)下田にて米国船で密航を謀りましたが露見して幽閉され、のち獄に入りました。安政4年(1857)許されて松下村塾で門人に修己治人・国家経世の学を講じました。京都で攘夷の志士を捕縛した老中間部詮勝の要撃を策して安政の大獄に連座し、江戸伝馬町の獄に入獄しました。安政6年(1859)10月に刑死しています。

#### 12. 高杉晋作（たかすぎ しんさく） 1839～1867（天保10年～慶応3年）

長州藩士高杉小忠太の子で家禄150石です。藩校明倫館で学び吉田松陰の松下村塾に入りました。のち江戸の昌平黌でも学びました。文久2年(1862)幕艦で上海に行き太平天国の乱を見分しています。文久3年(1863)藩主から馬関での攘夷を命じられ奇兵隊を組織して外国勢と戦いました。同年「8月18日の政変」で京を追われ、元治元年(1864)下関砲台占拠の講和の使者を務めました。第一次長州征伐に敗れた後、和議を進める藩に反対して藩論を討幕に転換させました。その後長州再征伐で幕府軍に勝利しています。

#### 13. 橋本左内（はしもと さない） 1834～1859（天保5年～安政6年）

福井藩医橋本長綱の子。嘉永5年(1823)家督を継ぎ藩医となります。安政元年(1854)江戸に游学し藤田東湖・西郷隆盛らとも交わりました。藩主松平慶永に認められ安政4年(1857)には藩政改革の中心となります。横井小楠を政治顧問として招き、開国貿易・殖産興業・軍備強化を目指して藩政改革を行いました。將軍継嗣問題が起ると藩主慶永の意を受け、一橋慶喜擁立のため上洛して諸大名・公卿の説得にあたりましたが井伊直弼の大老就任で失敗し、藩主慶永も隠居謹慎となり、左内は捕えられて江戸小伝馬町の獄で刑死しました。

#### 14. 伊達宗城（だて むねなり） 1818～1892（文政元年～明治25年）

旗本山口直勝の子で宇和島藩主伊達宗紀の養子です。弘化～安政期(1844～1859)藩政改革を推し進め、富国強兵・殖産興業政策を推進しました。福井藩主松平慶永・土佐藩主山内容堂・薩摩藩主島津斉彬と交流を持ち四賢侯と称されました。老中阿部正弘の時代は積極的に幕政へ関与しましたが、大老井伊直弼とは対立し隠居謹慎を命じられています。天皇を首長とする連邦国家を構想し、明治政府樹立後は議定などを歴任しました。

#### 15. 松平容保（まつだいら かたもり） 1835～1893（天保6年～明治26年）

万延元年(1860)桜田門外の変の後に幕府と水戸藩の調停にあたりました。文久2年(1862)松平慶永と共に幕政に参画し、同年京都守護職に就いて公武合体を推進しました。文久3年(1863)「8月18日の政変」で薩摩藩と協調して尊攘派排撃のクーデターに成功します。翌年「禁門の変」で長州藩兵を撃退しました。慶応3年(1867)の大政奉還後に職を解かれて大坂に退き、同4年(1868)鳥羽伏見の戦いの後江戸に帰りました。その後の会津戦争では佐幕派列藩同盟の中心となり、会津若松城に拠って討幕軍と戦いましたが敗れました。

#### 16. 白虎隊（びやっこたい）

会津藩の少年兵士隊。明治元年(1868)3月、戊辰戦争にあたり会津藩は藩兵を年齢別に組織替し、16歳～17歳の藩兵で構成されたのが白虎隊です。白虎隊は士中1・2番隊91名、寄合1・2番隊173名、足軽隊79名の343名からなります。同年8月に入り新政府軍が会津に迫ると寄合隊は越後口に、他の隊は城の内外周辺に配置されました。同年8月22日東方の要地十六橋に新政府軍が迫ると士中隊37名が出撃して戸ノ原口で戦いましたが敗走し、翌日



20名が飯盛山にたどり着き、市街の戦火を落城と誤認して集団自決したといわれます。うち一人が蘇生して白虎隊の悲劇が後世に語られました。

### 17. 千葉周作（ちば しゅうさく） 1794～1855（寛政6年～安政2年）

陸前に生まれた幕末期の剣客で北辰一刀流の祖です。中西忠兵衛子正に学び一刀流の奥義を極めました。高柳又四郎との勝負、神道無念流の木村定次郎との試合、馬庭念流の樋口十郎左衛門との争いなどが知られます。幕末3剣士の1人で門人は3千人といわれました。

### 18. 坂本龍馬（さかもと りょうま） 1835～1867（天保6年～慶応3年）

土佐藩高知城下の郷土の家に生まれ、嘉永6年(1853)江戸に出て千葉周作の弟定吉に剣道を学びました。文久元年(1861)武市瑞山の土佐勤王党に加わり志士活動に奔走し、翌年脱藩し江戸に出て勝海舟の門に入りました。神戸海軍操練所設立などに尽力し、文久3年(1863)「8月18日の政変」後に同操練所が閉鎖されると、薩摩に赴き西郷隆盛・木戸孝允と会い薩長の和解・連合に尽力しています。慶応2年(1866)薩長連合の盟約に立ち会い、その直後寺田屋で幕吏に襲われましたが愛人お龍の機転で救われました。慶応3年(1867)土佐藩主山内容堂を動かして幕府の大政奉還を実現し、新政府の構想「船中八策」の実現に尽くしましたが同年11月京都近江屋で暗殺されました。

### 19. 近藤 勇（こんどう いさみ） 1834～1868（天保5年～明治元年）

武蔵国多摩郡上石原村宮川久次郎の3男に生まれ近藤周助の養子となります。八王子の天然理心流近藤周助の元で剣術を学び、近藤家を継いで天然理心流4代目家元となりました。文久3年(1863)将軍家茂上洛に伴い尊攘派志士を牽制するために結成された新徴浪士隊に参加し洛外未生村に屯集しました。その後京都守護職の支配下に入り新選組を結成しました。明治元年(1868)鳥羽伏見の戦いで敗戦後関東に帰り、佐幕軍甲陽鎮撫隊を組織して新政府軍と戦って敗れました。敗走後、下総国流山で捕われのち斬殺されました。

#### 【参考文献】

『国史大辞典』11巻 吉川弘文館 平成2年

『国史大辞典』12巻 吉川弘文館 平成3年

『コンサイス日本人名事典』三省堂 平成16年7月

